

幼児の向社会的行動

——母親自身の向社会的行動や養育態度との関連——

島田 知華*・桂田恵美子**

抄録：母親の受容的な養育態度が子どもの向社会的行動を育てるとする仮説1、母親の向社会的行動が高ければ高いほど子どもの向社会的行動も高くなるという仮説2を検証することを目的に本研究を行った。子どもの向社会的行動に対する質問紙、母親の養育態度についての質問紙、母親自身の向社会的行動についての質問紙を幼稚園の保護者会で配布し、回答を求めた。回答は全て母親によるものであった。分析の結果、幼児の向社会的行動に男女差がみられ、女兒のほうが向社会的行動は高くなっていた。母親の受容的な養育態度は女兒の向社会的行動とのみ関連が見られ、仮説1は女兒にのみ支持された。また、母親の向社会的行動が高いほど男児の向社会的行動が高くなることが明らかとなり、仮説2は男児にのみ支持された。このように、幼児の向社会的行動の発達において、母親の影響が男女で違ったメカニズムであることが示唆された。しかし、本研究では母親のみにしか回答を求めておらず、今後、父親をも含め、子どもの向社会的行動に関してはより客観的な評定も含めた研究が必要である。

キーワード：幼児、母親、向社会的行動、養育態度、モデリング

問題と目的

現代社会において、子どもの不登校・いじめ・引きこもりといった社会問題は深刻になっている。このようないじめや不登校の原因のひとつとして、子ども自身の社会性、コミュニケーション能力の欠如が考えられる。子どもの社会性については、子どもの初めての社会である家庭環境が大きな基盤となっており、中でも親の養育態度と子どもの社会性について、これまでたくさんの研究が行われてきた。しかし、攻撃性や自己抑制の欠如など、社会にとって好ましくない行動に着目し、養育態度についても放任や拒否、服従といったマイナスの印象を持つ養育態度に着目した研究が多い（例えば、中道・中澤, 2003）。こうしたネガティブな養育態度だけでなく、母親のどのようなポジティブな養育態度が子どもの社会性にとって良い影響を与えるのかを研究していく必要がある。

戸田（2006）は、母親の養育態度と幼児の社会的行動についての関連を研究しており、服従的、過保護、甘やかしといった親の養育態度は幼児の自己主張や思いやり行動といったポジティブな社会行動にマイナスの影響を与えていることを明らかにしている。戸田（2006）によると、向社会的行動には愛他行動、援助行動、寄付行動、分配行動、共感性など様々な肯定的行動が含まれており一般的に思いやり行動とも言われている。向社会的

行動は人のために見返りを気にせず思いやりを持った行動であり、この向社会的行動の高い子どもは、他者を理解する能力に優れ、共感性も高いと言われている。

母親の養育態度の面で、暖かさや優しさをもって子どもに接していれば子どもの向社会的性も高くなるという森下（2006）の結果から、子どもは母親の暖かい許容的な養育態度を享受するだけでなく、母親の優しさ、暖かさといった社会性を真似しているとも考えられる。金子・新瀬（2002）は、養育態度として「関心的態度」に注目し、研究をしている。価値観が多様化し個人志向が強くなっている現代で、親が子どもに関心を示せば子どもも他人に対して関心を示し向社会的性が高くなる。しかし、親が子どもに無関心であれば子どもも他人に対し無関心で向社会的性が低くなることを明らかにしている。

このことから、子どもの社会性には養育態度だけでなく、子どもが親の行動を真似する「モデリング」も関係していると考えられる。モデリングとは、子どもが発達していく上で周りの人々をモデルにして真似をしながら成長していくことである。モデリングの対象となる人は子どもの周りにたくさんおり、子どもは多種多様な行動をモデルとしている（森下・庵田, 2006）。一般的に子どもがモデルとしやすい人は、子どもと親しい愛情関係にある人、子どもが何らかの形で自分と似ていると知覚する人、子どもにとってプラスになるような支配する力を持っている人である（中島, 1993）。また、向社会的

*関西学院大学文学部総合心理科学科

**関西学院大学文学部教授

行動は、発達初期の特定の対象（母親）との愛着形成によって基盤がつけられ、身近な人のモデリング、環境や養育態度の影響によって促進されている（武田・佐藤・菅原・昆、2006）。

本研究では養育者（母親）の養育態度だけでなく、子どもの主なモデルの対象である、母親自身の向社会行動も測定し、子どもの向社会的行動と母親の向社会行動との関連性も視野に入れて研究を行う。母親の養育態度に関しては、子どもとの関わり方や応答性に注目する。乳児の行動、たとえば泣く、微笑などが何度も何度も親によって受容され、更に適切に応答されることが子どもの愛着形成において非常に重要となっている（古畑・小嶋、1979）。つまり、愛着形成には応答性が必要となっており、その応答性の高さは、子どもを受容する養育態度につながる。つまり、母親が子どもに対して受容的であるということは、応答性も高く子どもの愛着は安定していると考えられる。そこで、母親の受容的な養育態度が子どもの向社会的行動に良い影響を与えているということを仮説1とした。また、モデリングを視野に入れて、養育者（母親）の向社会的行動が高ければ高いほどその子どもの向社会的行動も高くなるということを仮説2とした。これら2つの仮説を検討することを本研究の目的とする。

方 法

調査協力者および手続き

兵庫県伊丹市内の幼稚園に電話でデータ収集の協力を依頼し、協力を受けてくれたA幼稚園の保護者会で質問紙を配布し、その場で回答を求めた。全員が母親の回答であった。対象者はA幼稚園に通う3歳から6歳の園児105名（男児60名、女児45名）とその保護者であった。質問紙を120枚配布し、回答された105枚（回収率87.5%）を分析の対象とした。子どもの平均年齢は4.78歳（範囲：3～6歳）、標準偏差は0.88であった。

指標

親の養育態度に関する質問紙は、鈴木・松田・永田・植村が1985年に作成した「養育態度尺度」を使用した。この尺度は「受容」、「子ども中心主義」、「子どもの私有化」、「拒否」、「統制」、「敵意の含まれた統制」、「一貫性のないしつけ」、「ルーズなしつけ」、「接触回避」、「放任」の10の下位尺度各5項目ずつからなる50項目であった。各下位尺度の代表的な質問項目は「子どもの悩みや心配事を理解している」、「子どもと一緒に外出や旅行をするのが好きだ」などを含む『受容』、「子どもが喜びそうなことをいつも考えている」「子どもの事に充分気を配っている」などを含む『子ども中心主義』、「子どもに何か起こるといけないからあまりよそへ行きさな

いようにしている」、「子どもが大きくなって自分と過ごす時間が少なくなったのを残念に思う」などを含む『子どもの私有化』、「子どもの考えはばかげたもののように思える」、「子どもなんかいないほうが良かったと思うことがある」などを含む『拒否』、「子どもに対しては決まりをたくさん作り、それをやかましく言わなければいけないと思う」、「子どものした悪いことはみな、何かの形で罰を与えるべきだと思う」などを含む『統制』、「子どもに何事もどんなふうにしたらよいかを事細かに言い聞かせる」、「子どもがすべきことをちゃんとしてしまうまで何回も指示する」などを含む『敵意の含まれた統制』、「子どもが同じことをしても時によって叱ったり放っておいたりしてしまう」、「やってはいけないと私が言ったことを子どもがしていても黙って見ていることがある」などを含む『一貫性のないしつけ』、「子どもの言いなりになるほうだ」、「子どもが物を欲しがるとだめだといえない」などを含む『ルーズなしつけ』、「子どもとあまり話をしないほうだ」、「子どもと一緒に物事をするのはあまり好きでない」などを含む『接触回避』、「子どもの好きなようにいつも外出させる」、「子どもが望むままに自由にさせている」などを含む『放任』の合計50項目である。5段階評定を実施し、得点が高くなるほど各因子に当てはまることになる。

子どもの向社会的行動を測定する質問紙は、武田・菅原・吉田・笹原・加藤が2004年に作成した「思いやり行動尺度」を使用した。この尺度は幼児用に作成されている。質問項目は、「なっている子をなぐさめる」「わからなくて困っている子がいたら助けてあげる」などの項目を含む12項目であり、1因子からなる。これも5段階評定で回答を求め、得点が高くなるほど向社会行動が多いことを示す。

母親の向社会行動に関する質問紙は菊池が1988年に作成した「向社会行動尺度（大学生版）」のあてはまる項目を抜粋して使用した。この尺度は大学生向けに作られており、母親には当てはまらない項目も含まれている。以下の4項目「あまり親しくない友人にもノートを貸す」、「気持ちの悪くなった友人を保健室などに連れて行く」、「友人のレポート作成や宿題を手伝う」、「授業を休んだ友人のためにプリントなどをもらう」は母親への質問には適さないと判断し削除した。残された質問項目は、「列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる」、「お店で渡されたおつりが多かったとき、注意してあげる」などの項目を含む16項目であり1因子からなる。5段階評定で回答を求め、得点が高いほど向社会行動が頻繁に見られることになる。

結 果

各尺度の信頼性の検討

尺度ごとの信頼性を調べるため α 係数を求めた。その結果、養育態度尺度 .61, 母親の向社会的行動尺度 .87, 幼児の思いやり行動尺度 .88 となった。養育態度尺度の 10 因子ごとの α 係数は、「受容」.45, 「子ども中心主義」.58, 「子どもの私有化」.63, 「拒否」.24, 「統制」.32, 「敵意の含まれた統制」.57, 「一貫性のないしつけ」.63, 「ルーズなしつけ」.58, 「接触回避」.52, 「放任」.53 であった。

性差と年齢差

幼児の向社会的行動に男女間で差があるのかを調べるため、*t* 検定を行なった結果、有意な差がみられた ($t = -2.480, df = 103, p < .05$)。男児の平均値 (SD) は 41.32 (8.01), 女児の平均値 (SD) は 45.32 (7.18) であり、女児のほうが向社会的行動得点は高くなっていた。この結果から男女別に分析を進めていくことにする。また、年齢別で差があるのか調べるため一元配置の分散分析を行った結果、年齢別に差はみられなかった。

母親と子どもの向社会的行動との関連

幼児の向社会的行動の平均値 (SD) は 42.92 (7.85), 母親の向社会的行動の平均値 (SD) は 54.26 (9.79) であった。幼児の向社会的行動と母親の向社会的行動の関連を検討するために、相関分析を行なった結果、母親と子どもの向社会的行動間に、有意な弱い正の相関がみられた ($r = 0.32, p < .01$)。しかし、男女別に相関分析を行なった結果 (Table 1 参照), 男児にのみに有意な弱い正の相関がみられた ($r = 0.37, p < .01$)。

母親の向社会的行動と養育行動の関連

養育態度尺度各因子の平均値と標準偏差を Table 2 に示した。向社会的行動得点が高い母親はどのような養育を行なっているのかを調べるため、母親の向社会的行動合計得点と養育態度の因子ごとに相関分析を行なった。その結果を Table 3 に示している。Table 3 からわかるように、「受容」のみに有意な正の弱い相関がみられた ($r = 0.27, p < .01$)。このことから、向社会的行動を頻繁に行う母親はより受容的な養育態度であることがわかった。

母親の養育態度と子どもの向社会的行動

母親の養育態度の各 10 因子と子どもの男女別の向社会的行動合計得点との相関分析を行なった。その結果を Table 4 に示している。女児では「受容」と「子ども中心主義」と「接触回避」に相関がみられ、男児では「一

Table 1 母親の向社会的行動と子どもの向社会的行動の相関

	男児	女児
母親の向社会的性	0.37**	0.15

** $p < .01$

Table 2 養育態度尺度各因子の記述統計

	平均値	標準偏差
受容	21.27	1.90
子ども中心主義	20.42	2.34
子どもの私有化	14.76	3.34
拒否	12.16	2.01
統制	11.75	2.43
敵意の含まれた統制	12.66	2.56
一貫性のないしつけ	12.97	2.88
ルーズなしつけ	10.47	2.44
接触回避	21.15	2.52
放任	11.40	2.65

** $p < .01$

Table 3 養育態度各因子と母親の向社会的行動の相関

	母親の向社会的性
受容	0.27**
子ども中心主義	0.16
子どもの私有化	0.05
拒否	-0.15
統制	0.03
敵意の含まれた統制	-0.06
一貫性のないしつけ	0.00
ルーズなしつけ	-0.07
接触回避	0.17
放任	0.17

** $p < .01$

Table 4 母親の養育態度各因子と子どもの向社会的行動の相関

	男児	女児
受容	0.24	0.48**
子ども中心主義	0.25	0.32*
子どもの私有化	0.12	0.29
拒否	-0.16	0.03
統制	-0.15	-0.05
敵意の含まれた統制	-0.17	0.04
一貫性のないしつけ	-0.56**	-0.06
ルーズなしつけ	-0.06	-0.06
接触回避	0.16	0.42**
放任	0.09	0.13

* $p < .05$ ** $p < .01$

貫性のないしつけ」に有意な相関がみられた。

考 察

母親の受容的な養育態度が子どもの向社会的行動を高めるという仮説 1, 母親の向社会的行動が高いほど、子

どもの向社会的行動も高くなるという仮説2を検討することを目的として本研究を行なった。初めに、子どもの向社会的行動に性差があるのか調べるためt検定を行なった。その結果、男女差が認められ、男児より女児のほうが向社会的行動は高くなっていった。中台・金山(2002)によると、自己抑制において女児のほうが有意に高いことが明らかになっており、森下(2003)の研究においても男児よりも女児のほうが自己抑制が高いことを明らかにしている。更に、戸田・高野(2004)の研究においても男児よりも女児のほうが自己抑制が高いことを明らかにしている。自己抑制能力が高いということは自分よりも相手のことを考え行動できるということも含まれており、向社会的行動と関連していると考えられる。これら幼児の自己抑制の性差に関する先行研究結果を考慮に入れると、向社会的行動において男児よりも女児のほうが高いことは理解できる。

母親の向社会的行動と子どもの向社会的行動の関連を調べるために、相関分析を行った結果、男児のみに弱い正の相関がみられた。このことから、養育者の向社会的行動が高ければ高いほど子どもの向社会的行動も高くなるという仮説2は男児のみに支持された。性の同一化という視点から、女児の方が強い相関を示すと予測したが、予想外の結果であった。森下(2006)の研究によると、母親と男児、父親と女児の間の向社会的性強い正の相関がみられており、本研究の結果と一致する。また、幼少期においては、母親は息子を娘より可愛がる傾向にあることも報告されており(例えば、猪野・高橋・寺津・星野, 2000)、このような繋がりから男児における母親のモデリングが強いのかもかもしれない。しかし、今回は母親のみの回答しか得られておらず、今後、父親からもデータを収集し、女児と父親の相関も調べてみる必要がある。

母親の向社会的行動と養育行動との関連を調べるため、母親自身の向社会的行動と養育態度の相関分析を行った結果、養育行動の「受容」のみに弱い正の相関がみられたが、他の因子には相関はみられなかった。向社会的行動を頻繁に行う母親は、他人を受け入れることができ、他人に優しく思いやりを持って接することができるため子どもに対しても受容的で優しく接できると考えられる。

母親のどのような養育態度が子どもの向社会的行動を育てるのかを検討するため、母親の養育態度各因子と男女別の子どもの向社会的行動の相関分析を行った。その結果、「受容」、「子ども中心主義」、「接触回避」には、女児のみに弱い正の相関がみられ、男児には相関がみられなかった。一方、「一貫性のないしつけ」には男児のみに弱い負の相関がみられ、女児には相関はみられなかった。このことから、母親の受容的な養育態度が子ども

の向社会的行動に良い影響を与えているという仮説1は女児のみに支持された。本研究で母親の向社会的行動と男児の向社会的行動の関連が明らかにされたことも含めて考えると、男児と女児の向社会的行動の発達に母親は異なったメカニズムで影響を与えていると思われる。男児は社会学習理論が示すように母親の行動から向社会的行動を学んでいる。その為、母親の「一貫性のないしつけ」は混乱をもたらし、負の相関がでたのだと考えられる。一方、女児の場合、「受容的な養育態度」や「子ども中心主義」「接触回避」などと関連が見られ、母親との関係性から向社会行動を育てていると考えられる。

本研究では、幼児の向社会的行動の発達においてモデリングは男児に有効であり女児には受容的、子ども中心的な養育態度が有効であることが明らかにされ、男児と女児の向社会的行動の発達は母親の影響という点において異なったメカニズムであることが示唆された。しかし、今回の研究には限界もある。それは、母親の養育態度を測定した尺度の各因子の α 係数が低く、信頼性に欠ける点である。特に、本研究で注目した「受容」の信頼性が低いため、別の尺度で追試する必要があるだろう。また、全ての回答が母親によることも問題であるだろう。幼児研究においては、本研究のように母親からの回答のみを分析対象とするものが多いが、それは、あくまでも母親の視点からのみによるものであることを忘れてはならない。今後の研究においては、子どもの向社会的行動については母親以外にも幼稚園の担任の先生や祖父母など、子どもをよく知る人に回答を求め、より客観的な向社会的行動も測定する必要があるだろう。また、母親のみならず父親との関連も調査する必要があるだろう。

引用文献

- 古畑和孝・小嶋秀夫(1979), 心理学7家族心理, 有斐閣双書
- 猪野郁子・高橋巧・寺津千賀・星野泉(2000), 幼児を持つ両親の養育態度, 島根大学教育学部紀要, 34, 55-59
- 金子劭榮・新瀬和夫(2002), 小学生の向社会的性と親の養育態度, 金沢大学教育学部紀要教育科学編, 51, 145-158
- 菊池彰夫(1988), 向社会的行動尺度(大学生版), 心理測定尺度集II, 178-182
- 森下正康(2003), 幼児の自己制御機能の発達研究, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 13, 47-56
- 森下正康(2006), 幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング(2): 父母の態度パターンによる分析, 和歌山大学教育学部紀要, 56, 33

-41

- 森下正康・庵田奈甫（2006），幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング，和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，15, 47-56
- 中台佐喜子・金山元春（2002），幼児の自己主張，自己抑制と問題行動，広島大学大学院教育学研究科紀要，51, 297-302
- 中島力（1993），子どもの社会的発達，株式会社ソフィア
- 二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子（1995），思いやりのある子どもたち，北大路書房
- 鈴木真雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦（1985），子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成，愛知教育大学研究報告，34, 139-152
- 武田京子・佐藤ひとみ・菅原正和・昆保典（2006），幼児における向社会的行動（思いやり行動）と内的ワーキングモデル，岩手大学教育学部研究年報，65, 111-119
- 武田京子・菅原正和・吉田澄江・笹原裕子・加藤和子（2004），幼児の思いやり行動と攻撃行動-IWM（Internal Working Model）との関係-，岩手大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要，3, 47-54
- 戸田須恵子（2006），母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について，北海道教育大学釧路校研究紀要，38, 59-69